



曹禺劇作論 : 初期作品を中心に

姜, 小凌

(Degree)

博士 (学術)

(Date of Degree)

1998-03-31

(Resource Type)

doctoral thesis

(Report Number)

甲1876

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/D1001876>

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。



氏名・（本籍）	姜 キョウ 小 ショウ 凌 リョウ （中華人民共和国）
博士の専攻分野の名称	博士（学術）
学位記番号	博い第289号
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
学位授与の日付	平成10年3月31日
学位論文題目	曹禺劇作論 —初期作品を中心に—

審査委員	主査 教授 山田敬三	
	教授 中川正之	教授 水田恭平
	助教授 釜谷武志	

論文内容の要旨

本論文は四章から成り、曹禺の初期の代表作『雷雨』『日の出』『原野』という三大悲劇の脚本分析を中心に、これまでの曹禺研究であり重視されていなかった点を考察するとともに、三作品に共通するエディプス・コンプレックスをフロイト理論に基づいて分析し、また、作者が青年時代に影響を受けたキリスト教との関係から作品内容の特徴を論じている。

第一章は曹禺の処女作『雷雨』に見られるアリストテレスの『詩学』からの影響について分析した『『雷雨』論』である。この作品は、一九一〇年代末期の中国社会を背景として、鉅山主である周樸園一家に起こった家族崩壊の悲劇を描いたもので、一九三四年の『文学季刊』一卷三号に発表されて以来、劇のプロットに見られるギリシャ悲劇の影響については、これまで多くの文芸批評家および曹禺研究者が指摘してきた。本論文ではそれらの成果をふまえながら、『雷雨』におけるアリストテレスの『詩学』の影響を具体的に検討している。特にアリストテレスの「悲劇が人々の心を動かすにあたって最も大きな役割を果たす二つの要因、すなわち、逆変転と再認知とはいずれも筋の要素にはかならない」（『詩学』第六章）という悲劇の最も重要な原則を『雷雨』のプロットと結び付けてより詳しく分析するとともに、『詩学』における「単一の結末」説、つまり不幸な結末で終わることが最も悲劇らしい悲劇である（『詩学』十三章）という理論を用いて、西洋の伝統的悲劇と従来の中国の伝統的な悲劇に見られる「二重の結末」（ハッピーエンド）との間に相違点があることを指摘している。

第二章は、第二作『日出』について論述した『『日の出』論』である。曹禺は『雷雨』の成功によって文学界で一躍名声を得たが、彼はその芝居臭さを反省し、チャーホフのような飾り気のない淡々とした劇作法を学びたいと考え、一九三六年に四幕劇『日の出』を発表した。今回は平凡で退屈な日常生活を作品化しようと考え、『日の出』ではヒロイン陳白露の豪華なサロンを舞台として、社会のさまざまな人物を断片的に描いた。そして『日の出』は当時の社会や文壇に強烈な反響を呼び起こし、『大公報』文芸副刊の責任者蕭乾は読者の関心を引くため、一九三七年元旦の前夜に評論家や作家による『日の出』批評特集を企画し、全紙面を使って掲載した。論文では、ヒロイン陳白露の矛盾に充ちた性格と複雑な経歴の分析を通じて、この作品のもつ性格悲劇としての特色を具体的に検証してい

る。陳白露はその時代の犠牲者というよりは、むしろ彼女自身の性格上の欠陥によって悲劇を招いたという点を指摘したのであって、それは矛盾が三年前に発表した長篇小説『子夜』との対比によって、当時の中国大都会における社会矛盾を描いたと見る従来の作品論とは大きく異なっている。だが、同時に『日の出』は『雷雨』に比べると、作者の視野の拡大を感じさせ、三十年代の中国の様々な社会問題に対する掘り下げも深まっていることを、三等伎女院を描いた第三幕への評価を通して指摘している。

第三章は、曹禺の南京滞在期間中（一九三六年十月～一九三七年九月）に執筆された三幕の悲劇『原野』についての論文である。この作品は一九三七年四月に『文叢』誌上で連載が始まってから今年で六十年あまりになるが、その評価をめぐる論争は、中国ではいまだに継続中である。これまでも表現主義の視点から『原野』を評価する論文はあったが、完全に表現主義の立場からこの作品を論じたものは少なく、ほとんどはリアリズムの部分を肯定したうえで表現主義にも関連がある、といった論点が多かった。それらは作品そのものを否定するというよりは、表現主義という創作方法に対するイデオロギー的な反発だったと言えよう。だが、論者は階級的、社会的観念を超越し、芸術面から公正に『原野』を見直すべきだと強調する。特に第三節では、リアリズム論とは全く違う視点から『原野』が表現主義の神秘的、象徴的、幻覚的特徴と強い内的、芸術的関連性を持っていることをより具体的に分析している。第一に、それは濃厚な神秘的象徴的雰囲気を書いた描写を行っており、第二に、『原野』の細部の描写が非現実的であること、第三に、超現実的な人間関係と家族関係の描写をもつこと、第四に、人物の複雑な内面心理を描写していること、第五に、登場人物の怪異な外見と分裂した性格の描写が見られること、第六に、イリュージョン、幻覚の描写があることを指摘し、これまでの批評家によって「欠点」とされてきたこれらの特徴こそが、『原野』で試みられた表現主義的な創作の魅力であるという。

第四章では、従来の曹禺研究をふまえて上述の三大悲劇をまとめたうえで、それを作家自身の生い立ちと結び付け、精神分析学批評（第一節と第二節）、宗教学的批評、社会学的批評（第三節）などの手法を用いて曹禺の創作からうかがわれる深層心理を分析している。第一節では主に『雷雨』と『原野』を結び付けて、曹禺の悲劇に描かれたエディプス・コンプレックスについて詳細に検討しているが、この点はこれまでの曹禺研究では重視されていなかった重要な指摘である。第二節も精神分析の角度から、曹禺の初期悲劇における女性賛美および作家自身の個人的経歴と生活環境から見た曹禺の女性に対する崇拜意識を具体的に分析している。第三節では宗教学的批評と社会学的評判の方法を用いて、初期作品において曹禺がキリスト教から多くの影響を受けていることを指摘する。『雷雨』と『日の出』の二作には「善」「悪」および「終末への待望」といったインスピレーション（神の啓示）の暗示が見られ、非日常的な時空が描かれるが、これは曹禺の醜悪な現実社会に対する呪いと、それを瓦解させたいという意図を反映したものである。作家の伝記的事実、実生活と作品との相互関係、作品の背後に隠された作者の意図、あるいは作者自身も知らない無意識の領域の解明などは文学研究における重要なテーマである。本章のねらいは、作家の意識下の世界にまで踏み込んで、従来の曹禺研究を乗り越えようとするところにあるといえよう。

なお、上記の論文以外に、巻末には1985年以降1996年の曹禺の逝去にいたる晩年部分を新しく附加した「曹禺年表」と、現在判明する限りの資料を収集した「曹禺著・訳資料集」及び「曹禺関係日本語資料文献目録」を「付録」として掲げており、それらは今後の曹禺研究に対する貴重な学術面での資料となっている。

論文審査の結果の要旨

本論文の最大の特色は、中国近代戯曲の基盤を築いた曹禺初期の三大悲劇が、アリストテレスによって確立された文芸の創作法則に則って制作されたものであることを、作品に即して具体的に分析し、結論付けた点にある。また、フロイトの精神分析説を適用して、曹禺の作品に見られるエディプス・コンプレックスを明快に指摘している点も評価することができる。このため、本論文はこれまで見過ごされてきた問題点に初めて光をあて、また従来の研究の誤謬を指摘するなど、いくつかの創見を含むものとなり、曹禺悲劇研究上の価値ある論文となっている。

本論文での独創的な学説の主要なものを以下に列記すれば、

(1) 曹禺が初期に創作した悲劇の中に、アリストテレスの『詩学』にまとめられた悲劇の創作原則が適用されていることを具体的に分析したこと。従来もギリシャ悲劇が曹禺の初期作品に与えた影響について指摘した研究はあったが、本論文と同程度にまで「三一一致」の法則に言及した論文は見られない。なお、章末に【補説】として記された、「中国における『詩学』の受容史」は、資料としても貴重な価値を有する。

(2) 第二作の『日の出』における性格悲劇としての特色を明確に立論し結論したこと。これまで『日の出』は茅盾の長篇小説『子夜』等と対比して論じられ、両作品の社会性を抽出して、旧社会への批判的作品として取り上げられることが、とりわけ中国では多かった。そうした見解に対し、本論文はヒロインともいべき陳白露の悲劇がむしろ彼女の性格に起因する悲劇として描かれていることを指摘し、そのことを第四章ではフロイトやキリスト教との関係で見直している。

(3) 第三章の『原野』論は、いまなお評価の定まらない『原野』について、それが表現主義の立場から創作された作品であることを強調した分析内容であって、従来は欠点とみなされてきた非現実的な叙述こそが、この作品の特色であり、すぐれた点であることを的確に指摘している。『原野』に表現主義の影響のあることは中国でもすでに言及した論文は出ていたが、それはリアリズムを過度に重視するイデオロギー的な立場から否定的にとらえるものであって、本論文のような肯定的立場からの研究はまれであった。

(4) 個々の作品に対する以上の分析に加えて、第四章では三作品に共通する特徴を、フロイト理論の適用やキリスト教との関連、ギリシャ悲劇全般との比較によって論述し、従来の曹禺戯曲論に欠落していた新たな分析の観点を導入している。とりわけ、『雷雨』と『原野』に見られるエディプス・コンプレックスを作者自身の生い立ちと重ね合わせて論じた点には独創性が見られる。

(5) 以上のほか、巻末には1985年以降1996年の曹禺の逝去にいたる晩年部分を新しく附加した「曹禺年表」と、現在判明する限りの資料を収集した「曹禺著・訳資料集」及び「曹禺関係日本語資料文献目録」を「付録」とする貴重な学術面での資料を含む。

以上のような審査結果と論文内容に鑑み、当審査委員会は論文提出者姜小凌に博士（学術）の学位を授与するのが妥当との結論に達した。